

## 1. はじめに

本研究は日本語形容詞の意味論的研究の一環であるが、本稿では、感覚形容詞と次元形容詞の共感覚的用法 (synaesthesia usage) を中心に、日本語の意味拡張 (semantic extension)<sup>1</sup> について考察したいものである。

五感を表す形容詞と次元を表す形容詞は本来の感覚分野、或いは次元とは別に、他の分野を表す用法がある。例を見てみよう。

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| (イ) 黄色い声 (視覚→聴覚) | (ロ) 冷たい色 (触覚→視覚) |
| (ハ) 渋い魅力 (味覚→心理) | (ニ) 高い匂い (次元→嗅覚) |

これまで、感覚形容詞、次元形容詞の体系や語義についての先行研究はいくつか見られる (例えば、国広 (1967) (1982) (1989)、小出 (2000)、丹保 (1991)、西尾 (1972)、細川 (1984)、武藤 (2001) など)。しかし、次元と感覚の間について系統的に論究されたものは管見ではあまりないようである。

一体、感覚形容詞、次元形容詞<sup>2</sup>が元の分野から他の分野を表すように転用されるのは、どんな認知的メカニズムに基づくのか。感覚表現と次元表現の間はどんな意味拡張の体系を呈するのか。それを明らかにするのが本稿の狙いである。

## 2. 感覚形容詞の意味拡張—共感覚的用法を中心に

現代日本語では、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚を表す感覚名詞は、もとの感覚領域の形容詞のほかに、多くの形容詞で修飾されることがある。言い換えれば、日本語感覚形容詞は、原感覚のほかに意味拡張して他の感覚を表すことがある<sup>3</sup>。国広 (1998 : 175-176) は多義語 (polysemic word) を「ある同一の音形 (で、かつ同一の品詞で同一の活用形) に例えば四つの互いに意味的に区別される意味が結びついている時、その四つの意味が意味的に関

<sup>1</sup> ある語において従来とは異なる新しい意味が派生することを意味拡張と呼ぶ。

<sup>2</sup> 国広 (1989) が指摘したように、次元は視覚の外界投射の働きの結果で、視覚の中に含まれているものである。但し、色彩、明暗という、光に関する視覚現象に比べれば、瀬戸 (1995) に述べてあるように、空間を規定し、その広がり方を表す概念である次元は、存在、位置、運動、場所、方向、内外、離接、上下、前後などの多様化する要素を持つ体系である。それで、本研究では、次元を視覚と区別して、独立した概念と見なすことにする。

<sup>3</sup> 頼 (2004 : 238-243) を参照されたい。

連を持っているか、あるいは同一の現象素に基づいていると見られる場合、全体で一つの多義語を構成する」のように定義している<sup>4</sup>が、原感覚以外の感覚領域を表す形容詞は、つまり多義性をもつ感覚形容詞と言えよう。一体こういう感覚形容詞の意味拡張はどのように出来上がったのか、五感形容詞の共感覚用法を中心に考えてみたい。

## 2.1 視覚形容詞の意味拡張

(1) 烈風とその鋭い匂いとに、彼は奇妙に興奮し、胸をおどらせながら何か楽しいことを待つときのように落着かなかった。(マン「トニオ・クレーゲル」)

(2) 五月の花々や、誇りにみちた制服や、明るい笑い声などに対する私の礼儀なのだ。(三島由紀夫「金閣寺」)

例1の「鋭い匂い」における「鋭い」は視覚から嗅覚への転用である。「匂い」は嗅覚を表す名詞である。「鋭い」はもともと「刃物などの先がとがっている」<sup>5</sup>さまで、つまり視覚を表す<sup>6</sup>。視覚と嗅覚とは感覚的に異なったモダリティに属するものである。そうすると、「鋭い匂い」は感覚はずれのものになってしまう。しかし、考えてみると、「鋭い」は、その尖っている印象によって、何かが激しいことを表すように転用する可能性がある。「鋭い匂い」という表現は、尖っている形という視覚でつんと鼻をつく激しい匂いという嗅覚のモダリティを表すようになることが考えられよう。それは、鼻で激しい匂いを嗅いだ瞬間、尖っている形を見たかのように感じられる同時性、そして、匂いの嗅覚と形の知覚の共起性に動機付けられている。つまり、「鋭い匂い」は人間の基本的な認知能力の一つである参照点能力(reference-

<sup>4</sup> 国広(1982: 97)では、多義語を「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結びついている語をいう。」のように定義している。

<sup>5</sup> 電子辞典『広辞苑』「鋭い」項による。

<sup>6</sup> 「鋭い」は触覚形容詞だという説もあるが、国立国語研究所編『分類語彙表(増補改訂版)』(2004年)においては、「鋭い」が「3.1800 形」項目に分類されている。本稿ではそれに従って、「鋭い」を視覚形容詞と見なすことにする。

point ability)<sup>7</sup>によるメトニミー（換喩・metonymy）表現だといえよう<sup>8</sup>。

例2の「明るい笑い声」における「明るい」は視覚から聴覚への転用である。「明るい」は「光が十分にさして物がよく見える状態である」<sup>9</sup>ので、「明るい笑い声」は陽気で楽しげな笑い声のことをさす。明るい光と朗らかな笑い声とは人の心を晴れ晴れとさせるのが共通点であろう。そうすると、もともと視覚を表す「明るい」が聴覚に転用するのは類似性によるメタファー（metaphor）<sup>10</sup>に基づく用法だと判断されよう。但し、「明るい笑い声」を聞いて、まるで十分に射している光を見たように感じられたら、それは声の聴覚と光の知覚の隣接性に基づくメトニミーの表現とも言えるのではなからうか。

「鋭い匂い」「明るい笑い声」における共感覚的転用は、直接に「視覚から嗅覚へ」、「視覚から聴覚へ」というよりも、両者とも心理的要素が絡んでいるように思われる。そのプロセスは次のように表示される。

鋭い（視覚） → 尖っているさま（視覚） → 強烈な感じ（心理）  
                   → 強烈な感じ（触覚） → 鋭い匂い（嗅覚）  
 明るい（視覚） → 曇りがなく、晴れやかな様（視覚）  
                   → 明朗である様（心理） → 明るい笑い声（聴覚）

## 2.2 聴覚形容詞の意味拡張

(3) 屋根の色が統一されていて、うるさい色がないためか、とても、自然な感じさえます。（junjun8.cool.ne.jp）

<sup>7</sup> 一般に、探し求めている対象は、常にわれわれの身の回りの世界に直接に発見できる状態で、あるいは直接に手にとることができる状態で存在するとは限らない。状況によって、何らかの間接的な手がかりをヒントにし、ある経路をたどっていくことによって、はじめてターゲットとしての対象に到達していくのが普通である。人間の注目すべき認知能力の一つは、ある対象を探索のための手がかりとして参照しながら、ターゲットに到達していくことができる能力である。山梨（2000：85-86）によれば、Langackerはこの能力を参照点能力とよんでいるという。

<sup>8</sup> 日本語形容詞の共感覚的用法はこれまで主にメタファーによる意味拡張だと分析されてきた。但し、そのうち、ある感覚を知覚する時、それに伴うもう一つの感覚も知覚する共時性に動機付けられるメトニミーに基づくものもある。また、メタファーかメトニミーか判別しにくいものもあるという。詳しくは、谷口（2003）を参照されたい。

<sup>9</sup> 電子辞典『広辞苑』「明るい」項による。

<sup>10</sup> 2つの事物・概念の類似性に基づくメタファーの基盤となる基本的な認知能力は、2つの対象を比較するという能力である。詳しくは、靱山（2002）、松本（2003）などを参照されたい。

(4) どの料理もスパイスをふんだんに使っているが、かといって利きすぎたうるさい味になっていない。おいしかった。(www.fb001726.org)

(5) 潮騒が耳許でうねりだす。うるさい匂いが鼻孔をひたす。

(www.geocities.co.jp)

例 3-5 の「うるさい色」「うるさい味」「うるさい匂い」はそれぞれ「聴覚→視覚」「聴覚→味覚」「聴覚→嗅覚」の共感覚的用法である。日本の国語辞典でも日中辞書でもそれらしい例があまり見られないが、インターネットでは用例<sup>11</sup>が考察される。「うるさい」における「視覚」「味覚」「嗅覚」への転用は、ある色か味か匂いに接したとき、いやな感じが生じて、まるでいやな音か声を聴いたような感覚統合が起きることが考えられよう。そうすると、次のような感覚転用のプロセスになる。

|                        |   |                |
|------------------------|---|----------------|
| うるさい (聴覚) → いやな感じ (心理) | [ | うるさい色 (聴覚→視覚)  |
|                        |   | うるさい味 (聴覚→味覚)  |
|                        |   | うるさい匂い (聴覚→嗅覚) |

聴覚表現から視覚表現へ、聴覚表現から味覚表現へ、そして、聴覚表現から嗅覚表現へ転用したというのは、つまり、目と耳、舌と耳、そして、鼻と耳で同時に何かを感じられたことといえよう。こういう感覚器官の隣接性および同時に起きる感覚統合の転用表現は、メトニミーに基づくものである。そして、上の例 3-5 の 3 例ともいやな感じという心理によるところが大きい。

## 2.3 嗅覚形容詞の意味拡張

(6) フライパンに油を 2 c m ほど敷いて餅を揚げます。香ばしい色がいたら油を切ります。(www.s-recipe.com)

(7) 全員一口ずつ食べてその感想を口にした。「虫だ…」「まずい！」「せめて揚げてあれば…」「つゆが生臭い」とさんざんな声が飛び交う。口中には独特の生臭い味が充満している。(www.f-h.co.jp)

(8) 私の後ろを自転車を通り過ぎたと思うと、釈迦如来が降臨される時のような楽曲が聞こえてきたのです(それくらい芳しい音色だったのです)。不思議に思った私は缶ジュースを手に、数歩そちらに歩み寄りました。と、どうでしょう？そこには銀色の光彩を放つ 5 百円玉が落ちていたのです。

<sup>11</sup> 2004 年 9 月 19 日に検索エンジン google で検索した結果、「うるさい色」の例は 91 件、「うるさい味」の例は 45 件、「うるさい匂い」の例は 3 件考察された。

(www.himekuri.net)

嗅覚から視覚への意味拡張と嗅覚から聴覚への意味拡張は判断のゆれがあると指摘されている<sup>12</sup>が、実例が少なくない。例 6-8 に見た「香ばしい色」は「嗅覚→視覚」、「生臭い味」は「嗅覚→味覚」、「芳しい音色」は「嗅覚→聴覚」の転用である。色、味、音色に接して嗅覚的な感覚が生じるには、それぞれ視覚と嗅覚、味覚と嗅覚、聴覚と嗅覚における統合が考えられる。その転用過程のメカニズムは次のようになる。

- 香ばしい (嗅覚) → いい香がする物の外形を連想する (心理)  
→ 香ばしい色 (嗅覚→視覚)
- 生臭い (嗅覚) → 生臭い物を口にしたときの味覚を連想する (心理)  
→ 生臭い味 (嗅覚→味覚)
- 芳しい (嗅覚) → いい香に接した時のいい気持ち (心理)  
→ 芳しい音色 (嗅覚→聴覚)

「香ばしい色」では「嗅覚→心理→視覚」、「生臭い味」では「嗅覚→心理→味覚」、「芳しい音色」では「嗅覚→心理→聴覚」という転用過程が考えられよう。そういう心理過程があるからこそ、例 9 のように、「生臭い味」で言葉を修飾する、心理的用法が見られるのであろう。

(9) その伊木の答は嘘ではなかった。朝子が自分の教えている生徒だ、ということを伊木は油井に告げなかった。この際、「教え子」という言葉は、なにか生臭い味で伊木に迫ってくる。(吉行淳之介「樹々は緑か」)

## 2.4 味覚形容詞の意味拡張

(10) 日曜の動物園の埃りは甘い匂いがする。寢床のなかで本を読む少女の手はたえずワックス・パラフィン紙を剥いているだろう。これらは信じてよい現実である。キャラメルは売れているのだ。(開高健「巨人と玩具」)

(11) 気を付けよう！甘い言葉と暗い道。(日本の街の標語)

(12) 本来、吟子は撫で肩のうえに、小柄で細身である。和服の似合う体型であった。引き締った顔に渋い地色の上等の着物を着たところはいかにも落ちついた名門の夫人に見えた。(渡辺淳一「花埋み」)

「甘い」は味覚形容詞であるが、例 10 では嗅覚的に用いられている。そ

<sup>12</sup> 山梨 (1988 : 58) 参照。

れは何か甘いものを食べたとき、味覚と共に感じられた匂いが記憶され、そして、今度は嗅覚の記憶から甘いという味覚的イメージが想起されて、「甘い匂い」というような表現が出来上がった、と類推されよう。この転用は、味覚が直接に嗅覚に転用するものである。というのは、味覚はもともと接触した食べ物や飲み物の色、味、匂いなどの総合感覚だからである。そして、総合感覚における味覚と嗅覚の同時性から考えてみれば、「甘い匂い」はメトニミーに基づく転用だと判断されよう。

「甘い言葉」は味覚形容詞「甘い」の聴覚的用法である。その用法では、甘いものを食べたり飲んだりするときの、楽しい気持ちに関係していると思われる。「甘い匂い」と同じように、参照点能力によるメトニミーの転用である。

「渋い色」は台湾人学習者の理解とはだいぶ離れた表現<sup>13</sup>で、好ましい色を表すのである。渋い味のことと全然異なったイメージになるが、その転用のプロセスはどのようになっているのか、考えてみよう。「渋い」は渋柿を食べた時のような、舌を刺激する味を表す形容詞であるが、多義性をもつ表現である<sup>14</sup>。味が滑らかでないことから、日本人に喜ばれるような派手でない、地味で落ち着いた深い味という意が派生したようである。これは人間の参照点能力によるメトニミーに基づく転用だと判断されよう。

「甘い匂い」「甘い言葉」「渋い色」の転用過程は次のように考えられる。

甘い（味覚）→ 甘い匂い（嗅覚）

甘い（味覚）→ 楽しい気持ち（心理）→ 甘い言葉（聴覚）

渋い（味覚）→ 滑らかでない感じ（心理）→ 派手でない感じ（心理）

→ 落ち着いた深い味があるような感じ（心理）

→ 渋い色（視覚）

ちなみに、日本語基本味覚形容詞のうち、「酸っぱい」「甘い」「苦い」「辛い」には嗅覚、触覚、視覚、聴覚の四種類の感覚への転用はあるが、「渋い」には嗅覚、視覚と聴覚への転用しか観察されなかった（表1「味覚形容詞共感覚的用法の実態」を参照されたい）。

<sup>13</sup> 2004年9月中旬に東呉大学の台湾人大学院生25人に、「渋い色は好ましい色ですか」と聞いた結果、24人は「いいえ」と答えてくれた。「はい」と答えた人は日本に長期滞在の体験のあるものであった。

<sup>14</sup> 「渋い」の多義性について、詳しくは頼（2004：87-105）を参照されたい。

(表 1) 味覚形容詞共感覚的用法の実態

| 原感覚  | 共感覚 |    |    |    |
|------|-----|----|----|----|
| 味覚   | 嗅覚  | 触覚 | 視覚 | 聴覚 |
| 酸っぱい | ○   | ○  | ○  | ○  |
| 甘い   | ○   | ○  | ○  | ○  |
| 苦い   | ○   | ○  | ○  | ○  |
| 辛い   | ○   | ○  | ○  | ○  |
| 渋い   | ○   | ×  | ○  | ○  |

(頼 (2004 : 82) による)

(注) 「○」は共感覚用法があること、「×」は共感覚用法がないことを表わす。

## 2.5 触覚形容詞の意味拡張

(13) 鮎太は何となく左山町介のその時の眼を嫌だと思った。親しさの全くない冷たい眼だった。(山本有三「路傍の石」)

(14) 風がいくらか出てきたらしく、軒端の風鈴が涼しい音をたてる。(渡辺淳一「花埋み」)

(15) それからまた、びいどろという色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれを嘗めて見るのが私にとって何ともいえない享樂だったのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。(梶井基次郎「檸檬」)

(16) 部屋へ帰ると窓近い櫨の木の花が重い匂いを部屋中にみなぎらせていました。(梶井基次郎「櫨の花」)

「冷たい眼」は触覚から視覚への意味拡張である。ある人の目を見て、過日の冷たいものに触った、暖かみのない感じが蘇ったことによって、親しさのないような人情に薄いさまを表す「冷たい」の視覚的用法が生ずるわけである。これは触覚から直接に視覚へ転用するのではなく、その間に表現主体の心理が介在しているのである。

例 14 のように、風鈴の音を聴いた時、まるで何か清涼感をもつ物に触ったような清しい気持ちになったことによって、「涼しい音」という聴覚的用法が生じるのである。但し、マイナスイメージの「冷たい眼」と違って、「涼しい音」はプラスイメージである。

「涼しい味」は例 15 のように、「何ともいえない享樂だった」という意味で用いられる表現である。これも「涼しい音」と同じくプラスイメージで、

好ましい感じによる意味拡張である<sup>15</sup>。

「匂い」は普通、「臭い匂い」「香ばしい匂い」「いい匂い」のように嗅覚形容詞か評価形容詞で修飾されるが、例 16 の「重い匂い」のような触覚的用法も見られる。「重い」はもともと目方が多いことを表すが、ここでは甚だしい程度を表す意になっている。つまり、触覚から心理、程度の概念に転じて、また、嗅覚を表すように変わったのである。

例 13-16 に見た触覚形容詞の意味拡張の過程を表示すると、次のようになる。

- |         |   |                        |
|---------|---|------------------------|
| 冷たい（触覚） | → | 暖かみを感じられない（心理）         |
|         | → | 人情に薄い（心理）→冷たい眼（視覚）     |
| 涼しい（触覚） | → | 清清しく感じられる（心理）→涼しい音（聴覚） |
| 涼しい（触覚） | → | 清清しく感じられる（心理）→涼しい味（味覚） |
| 重い（触覚）  | → | なかなか動かしにくく感じられる（心理）    |
|         | → | 甚だしく感じられる（程度）→重い匂い（嗅覚） |

### 3. 次元形容詞の感覚的意味拡張

本研究では、国広（1982：157）にしたがって、国立国語研究所『分類語彙表増補改訂版』における「3.1911 長短・高低・深淺・厚薄・遠近」、「3.1912 広狭・大小」項に挙げられている「大きい、小さい、高い、低い、長い、短い、太い、細い、広い、狭い、厚い、薄い、深い、浅い、遠い、近い」という次元形容詞を考察対象とする<sup>16</sup>。本研究の調査によると、次元形容詞の感覚的用法は次の表 2 のように整理される<sup>17</sup>。全般的に言えば、次元形容詞は例 17-26 のように、五感の視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚へ転用する例が見られる。

<sup>15</sup> 「涼しい眼」はプラスイメージ、「涼しい顔」はマイナスイメージというように、慣用句における「涼しい」のイメージは決まっているわけではない。

<sup>16</sup> 但し、1964 年に出版された『分類語彙表』では、次元形容詞は「3.1920 長い・広い」項及び「3.1921 厚い・太い・大きい」項になっている。

<sup>17</sup> 表 3 は 2004 年 9 月中旬に検索エンジン google でインターネットの日本語ページを検索した結果および新潮文庫の 100 冊（CD-ROM 版）から採録した例による統計である。



(表 2) 次元形容詞の感覚的意味拡張

| 次元<br>形容詞<br>感覚的<br>用法 | 大きい | 小さい | 高い | 低い | 長い | 短い | 太い | 細い | 広い | 狭い | 厚い | 薄い | 深い | 浅い | 遠い | 近い |
|------------------------|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 視覚                     | ○   | ○   | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |
| 聴覚                     | ○   | ○   | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |
| 嗅覚                     | ×   | ×   | ○  | ×  | ○  | ×  | ×  | ※  | ※  | ×  | ○  | ○  | ○  | ※  | ○  | ○  |
| 味覚                     | ×   | ×   | ○  | ※  | ×  | ×  | ○  | ○  | ○  | ×  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |
| 触覚                     | ○   | ○   | ○  | ×  | ×  | ×  | ○  | ○  | ○  | ×  | ○  | ○  | ○  | ○  | ×  | ×  |

注：「○」は用例が見られること、「×」は用例が見られないこと、  
「※」は用例が 1 例しか見られないことを表す。

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| (17) 小さい光 (次元→視覚) | (18) 高い木 (次元→視覚)    |
| (19) 大きい声 (次元→聴覚) | (20) 低い声 (次元→聴覚)    |
| (21) 高い匂い (次元→嗅覚) | (22) 忍冬の高い香 (次元→嗅覚) |
| (23) 薄い味 (次元→味覚)  | (24) 香り高い味 (次元→味覚)  |
| (25) 細い感触 (次元→触覚) | (26) 高い熱 (次元→触覚)    |

但し、一口に次元形容詞といっても、語によって感覚的意味拡張の内訳が違っている。例えば、表 2 に挙げられた 8 組の次元形容詞は、すべて視覚へ転用する例と聴覚への転用例が考察された。しかし、嗅覚、味覚への転用例は、「厚い、薄い」「遠い、近い」には見られるが、「大きい、小さい」には見られなかった。そして、「高い」と「低い」では、嗅覚、味覚、触覚への転用例は「高い」には見られるが、「低い」には見られなかった。

前述したように、次元はもともと視覚の範疇に入っている概念であるので、視覚的用法が当然考えられる。では、聴覚への転用はどのようなメカニズムによるものなのか、見てみよう。

「大きい」はもともと容量が多く、場所を占めているさまを表すのである<sup>18</sup>。そして、甚だしいという程度概念をもつようになり、「大きい声」のような聴覚的用法は生じるわけである。「低い」は高さが少ないさまを表す。

<sup>18</sup> 電子辞典『広辞苑』「大きい」項参照。

そして、高くないことから音域が下のほうである「低い声」のような聴覚的用法に転用する。「大きい声、小さい声」のような転用は、次元から直接に聴覚へ転用するのではなく、程度という概念がその途中段階に入って、そして聴覚的用法になったのである。その意味拡張の過程は次のように表示されよう。

大きい（次元）→ 甚だしいこと（程度）→ 大きい声（聴覚）

低い（次元）→ 下のほうである（程度）→ 低い声（聴覚）

ちなみに、「高い声」「小さい声」はただ音域の高低を指しているが、「大きい声」「小さい声」は声だけではなく、表現主体の態度、様子も含んでいる。例えば、陽気なさまという要素は「大きい声」では考えられるが、それに対して、「高い声」では考えられない<sup>19</sup>。

次は次元の嗅覚、味覚、触覚への転用について見てみたい。

「高い匂い」「忍冬の高い香」における「高い」は空間的に上方にあることを表す意から、物事の程度が他より甚だしい意に変わり、嗅覚的用法に転用したのである。「薄い」は厚みが少ないさまから、密度が少ない概念に変わり、そして、「薄い味」のように、濃厚でない味のことを表すようになる。

「高い」は、空間的に上方にあることを表す意から、物事の程度が他より甚だしい意に変わり、「香り高い味」のような味覚的用法に転じたのである<sup>20</sup>。

「細い」は周囲が小さいことをさすが、量が少なく、微かである派生義をもつ語である。そして、微かの意から力が弱いことを表すようになり、「細い感触」のように触覚的用法が生じる。「高い」の触覚的用法である「高い熱」は、「高い香」と同じように、「空間的次元→程度」という途中段階を経て、熱がある基準を超えた、という触覚的用法になっている。

次元の嗅覚、味覚、触覚への転用過程を表示すると、次のようになる。

高い（次元）→ ある基準をこえる（程度）→ 甚だしい（程度）

→ 高い香（嗅覚）

薄い（次元）→ 密度が少ない（程度）→ 濃厚でない（程度）

→ 薄い味（味覚）

細い（次元）→ 微かである（程度）→ 力が弱い（程度）

→ 細い感触（触覚）

<sup>19</sup> 詳しくは久島（2002）第7章を参照されたい。

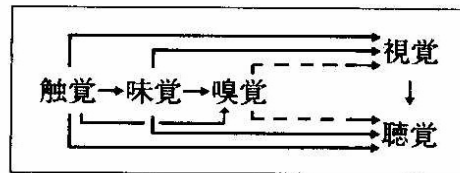
<sup>20</sup> 但し、「高い味」という表現は考察されなかった。

以上考察したように、次元から視覚への転用が類似性に基づくメタファーであるのに対して、次元から聴覚、嗅覚、味覚、触覚への転用の場合は、程度概念という途中過程が介しているの、メタファーというよりも、同時に二種類の感覚を知覚し、参照点に基づくメトニミーだと判断されよう。

#### 4. 感覚・次元形容詞による共感覚的意味拡張の体系

山梨（1988）では、感覚形容詞の共感覚的用法を図1のように表示している。

（図1）五感の修飾・被修飾関係



（山梨（1988：58-60）による）

しかし、前に考察した感覚形容詞の意味拡張を整理してみると、次のようになる。

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| (27) 明るい笑い声（視覚→聴覚） | (28) 鋭い匂い（視覚→嗅覚）    |
| (29) うるさい色（聴覚→視覚）  | (30) うるさい味（聴覚→味覚）   |
| (31) うるさい匂い（聴覚→嗅覚） | (32) 香ばしい色（嗅覚→視覚）   |
| (33) 生臭い味（嗅覚→味覚）   | (34) 芳しい音色（嗅覚→聴覚）   |
| (35) 甘い匂い（味覚→嗅覚）   | (36) 甘い言葉（味覚→聴覚）    |
| (37) 渋い色（味覚→視覚）    | (38) 手元の苦い感触（味覚→触覚） |
| (39) 冷たい目（触覚→視覚）   | (40) 涼しい音（触覚→聴覚）    |
| (41) 涼しい味（触覚→味覚）   | (42) 重い匂い（触覚→嗅覚）    |

このように、「視覚→嗅覚」、「聴覚→嗅覚」、「聴覚→味覚」「嗅覚→味覚」、「味覚→触覚」の用例が観察されている。以上の感覚形容詞による共感覚的用法を表示すると、（表3）のようになる。

(表 3) 日本語感覚形容詞による共感覚的表現の実態

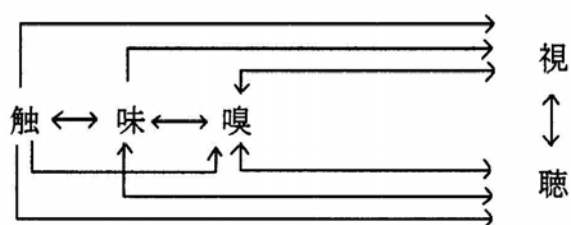
| 共感覚<br>原感覚 | 視覚 | 聴覚 | 味覚 | 嗅覚 | 触覚 |
|------------|----|----|----|----|----|
| 視覚         |    | ○  | —  | ○  | —  |
| 聴覚         | ○  |    | ○  | ○  | —  |
| 味覚         | ○  | ○  |    | ○  | ○  |
| 嗅覚         | ○  | ○  | ○  |    | —  |
| 触覚         | ○  | ○  | ○  | ○  |    |

(頼 (2004 : 259) による)

(注) 「○」は共感覚的表現があること、「—」は共感覚的表現がないことを表わす。

そうすると、山梨 (1988 : 60) で述べられているような共感覚的用法の方向性は図 2 のように書き直されよう。

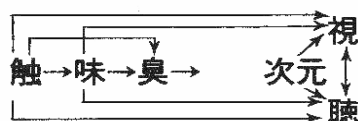
(図 2) 感覚形容詞の共感覚的用法の方向性



山梨 (1988) の「五感の修飾・被修飾関係」では、右方向の共感覚的用法しか見られなかったが、図 2 で見たように、感覚形容詞の共感覚的用法は、実は右方向だけではなく、左方向のものも見られるのである。

そして、国広 (1989) によれば、日本語形容詞の共感覚的比喩の体系は図 3 のように表示される。

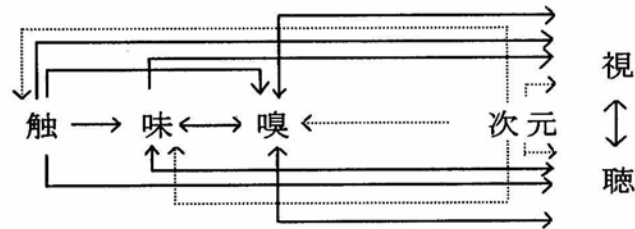
(図 3) 共感覚的比喩の体系



(国広 (1989 : 28) による)

図 3 を参照に、本研究で考察された次元形容詞の感覚的用法を入れて整理してみれば、図 4 のようになる。

(図 4) 日本語次元・感覚形容詞による意味拡張の体系



(頼 (2004 : 259) によって書き直されたもの)

図 4 を見て分かるように、次元から感覚への転用は、視覚と聴覚への右方向だけではなく、嗅覚、味覚、触覚への左方向も見られるわけである。そして、いままで一方向を呈するとされた感覚形容詞の共感覚的用法も左方向が見られることが分かった。

## 5. むすび

いわゆる感覚形容詞の共感覚的用法は、ある感覚モダリティから直接に他の感覚モダリティに転用するものもあるが、そうでないものもある。ある感覚モダリティから直接に他の感覚モダリティに転用しない共感覚的用法の場合は、基本義のほかに、その形容詞の多義構造について考察する必要がある(例えば、「うるさい色」「高い熱」など)。認知意味論的研究方法による多義語の意味構造に対する分析は、地味で有意義な作業である。特に外国語教育・外国語学習における意味伝授・意味理解において、重要なプロセスだと言えよう。本稿のような分析はまだいろいろ検討すべき余地もあるし、五感形容詞における感覚から次元への転用があるかどうか、という考察も残っていると思われるが、今後の課題にしたい。

ちなみに、言葉の変化はいつの時代でも見られる。また、表現主体によって異なった使い方も考えられるので、もっと多くの用例を考察し、分析すれば、別の結果になることも考えられよう。

## 後記：

本稿は「日本語次元形容詞研究」(国家科学委員会専題研究計画 計画番号：NSC 93-2411-031-020) の研究成果の一部であるが、「2004 當代認知語

言學與日與研究創新 研討會」(台灣大學日本語學科主催、國家科學委員會人文學研究センター共催、2004 年 11 月 13 日)において「日本語形容詞の意味拡張—感覚形容詞と次元形容詞の間を中心に—」という題で口頭発表したものを骨子に加筆したものである。

## 用例出典

新潮社『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版』1995  
インターネット公開されているサイト、検索エンジン：google

## 参考文献

- 池上嘉彦『意味の世界』東京：日本放送出版社、1978  
久島 茂『《物》と《場所》の意味論』東京：くろしお出版、2002  
国広哲弥『構造的意味論』東京：三省堂、1967  
国広哲弥『意味論の方法』東京：大修館書店、1982  
国広哲弥「五感を表わす語彙」『言語』18 卷 11 号、東京：大修館書店、1989  
国広哲弥「言語の認知的側面」『日本語学』14 卷九月号、東京：明治書院、1995  
国広哲弥『理想の国語辞典』（五版）東京：大修館書店、1998  
小出慶一「次元形容詞の空間的用法と非空間的用法」『群馬県立女子大学紀要』二一、2000（日本語論説資料 37-2 収録）  
国立国語研究所『分類語彙表』東京：秀英出版、1964  
国立国語研究所『分類語彙表 増補改訂版』東京：大日本図書、2004  
瀬戸賢一『空間のレトリック』東京：海鳴社、1995  
竹内晴彦「感覚表現の日本語」『日本語学』16 卷 10 月号、東京：明治書院、1997  
谷口一美『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』東京：研究社、2003  
丹保健一「多義語における語義の区切り方をめぐって」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』第 42 卷、1991  
新村出編『広辞苑』（電子辞典版）東京：SHARP

- 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』東京：秀英出版、1972
- 細川英雄「現代日本語の温度形容詞について」『信州大学教育学部紀要』53号、長野：信州大学、1984
- 松本 曜『認知意味論』東京：大修館書店、2003
- 武藤彩加「味覚形容詞『甘い』と『辛い』の多義構造」『日本語教育』110号、東京：日本語教育学会、2001
- 靱山洋介『認知意味論のしくみ』東京：研究社、2002
- 靱山洋介「認知言語学における語の意味の考え方」『日本語学』22 卷 9 月号、東京：明治書院、2003
- 山梨正明『比喻と理解』東京：東京大学出版会、1988
- 山梨正明「認知言語学の研究プログラム」『月刊言語』27 卷 11 号、東京：大修館書店、1998
- 山梨正明『認知言語学原理』東京：くろしお出版、2000
- 頼 錦雀『日本語感覚形容詞研究論文集』台北：致良出版社、2004